

全日本大学ディベート選手権の現状と今後

～ディベート甲子園との連続性を中心に～

全日本ディベート連盟 専務理事 久保健治

本稿の目的

全日本ディベート連盟は（CoDA）毎年12月に全日本大学ディベート選手権大会を開催してきた。これは、大学生の日本一を決める日本語ディベート大会であるが、トライアングルの読者の方に分かり易く説明するならば、「ディベート甲子園大学生版」というべき大会である。だが、これは単に比喻というだけでもない。

私達 CoDA は議論によって物事を決定する文化を日本に根付かせるという理念の下、NPO 法人格を取得して以降は官公庁や民間企業に対するディベートセミナーをはじめ、それ以外にも広くディベートの持つ価値を伝えるべく活動しているが、もともとはディベート甲子園 OBOG を含む学生によって結成された大学日本語ディベート大会を作成するための団体であった。

そういった歴史的経緯もあり、ディベート甲子園と大学選手権は互いに人的交流が盛んとなっている。理事を務めるメンバーの中にはディベート甲子園の運営において大きな役割を果たしているメンバーがいるだけではなく、例えば、当日に参加して下さっているスタッフやジャッジなどの顔ぶれを見ても甲子園でスタッフ、ジャッジとして活躍しているメンバーが多い。そして、この事はディベート甲子園における活躍は大学選手権においても発揮され、そしてその経験は翌年の甲子園に活かされるなど、ディベートコミュニティにおいても非常に有意義なものとなっている。

さて、ここで大学ディベート選手権大会の特徴について少し説明をしてみたい^[1]。まず試合形式であるが、フォーマット自体はディベート甲子園と同じ1立制を採用している。しかしながら、時

間に関しては大きく異なっており立論8分、質疑4分、反駁6分と甲子園よりもかなり長い。また、準備時間に関しては甲子園が固定されているのに対して、大学選手権では6分間をフレキシブルに取れるようになっており、より戦略性が増している。また、甲子園においては禁止事項となっている対抗政策（カウンタープラン）や定義性議論（トピカリティ）も許可されており、甲子園に比べると大きく自由度が高まっており、各チームの戦略性も多様なオプションをとる事ができるようになっている。こうした時間の長さやとれる戦略の多様さから、甲子園では実現できなかった議論展開も可能になっている。

ディベート甲子園では、現在も多くのOBOGが母校でのサポートに入っていると聞いているが、現役生の指導にあたる上においてもこうしたディベートキャリアの継続により、より良い指導ができるようになるし、異なるルールの大会を体験することで、改めてディベートという競技における価値についても深く理解できるようになるものと思われる。例えば、大学において選手として活躍し、甲子園ではスタッフとして活躍しているメンバーなどもいるが、そういったメンバーに聞いてみると常に両方の立場を知る事ができるために、運営に回っても選手に対して細やかな心配りを忘れないでいられるし、選手として出場している時には運営側の思いや不備を感じながら試合ができると言っている。

ディベートが教育イベントである以上、参加者がそれぞれの場において主体者意識を持つことは非常に重要であるが、特にこうした選手、運営の両方の気持ちが分かる経験は出場者にとってより良い大会を作っていくという改善プロセスにおいて

重要な人材となり得る。それは、どちらかにだけ所属しては見落としてしまうような事に対しても意識を配る事ができるようになるからである。学生時代にこうした体験を積むことは実社会に出た際に、様々な価値観を持つ人々（それは会社内における部署間であったり、顧客ニーズであったり必ず存在する）に対して理解しようとする気持ち、またその相違を前提したマネジメントという意識形成ができるようになるなど、一見分かりにくいかもしれないが、極めて有益なキャリア形成につながっていると思われる。例えば、選手を顧客、運営をサービス供給側と仮定してマネジメントをするならば、学生の段階から一人の顧客としてのニーズと、運営側に回った時のニーズに応えるためのリソースの限界といった事柄や、どんなニーズに応えていくべきかという判断などを体験する事ができる。もちろん、教育イベントである以上、完全なビジネスとはいえないが、選手に満足してもらうという意味では共通点も多いだろう。

このように、トライングル読者に即して言うならば、もしディベート甲子園以降も何かしらの形でディベートコミュニティに関わりたい、またディベートで学んだ事を本格的に実社会において応用してみたいと考える方にとって全日本大学ディベート選手権は選手、スタッフと多様な選択肢によって、それに応える事ができる十分な場を提供できるものと確信している。

昨年より大学選手権は読売新聞社との共同主催となり、ますますディベート甲子園との連続性を強めている。それは単に甲子園と大学選手権が繋がるというだけではなく、日本においてはじめて中高大と連続性をもった大会が存在することで、ディベートを通じたキャリア形成という事が本格的に社会に対して受け入れられる素地が誕生したという事も示している。これからの日本においてより良い人材を一番輩出してきたイベントはディベートだと言われるかもしれない可能性が本格化してきたのである。将来本当にそうなったならば、

皆さんはまさに歴史が作られた際に参加していた生き証人となるだろう。もし、自分が参加したイベントがそんな風になったら、どうだろう。もし、その事が好ましいと思うのならば、ぜひ私たちの活動への扉を叩いてほしい。私たちは、皆さんと一緒にその喜びを分かち合える事を楽しみにしている。

[1] 2011年11月現在における状況。